

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520431

研究課題名(和文)ハンガリー語における動詞接頭辞の文法化と構文変化

研究課題名(英文)Hungarian verbal prefixes:grammaticalization and case alternation

研究代表者

早稲田 みか(Waseda, Mika)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：30219448

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：ハンガリー語動詞接頭辞の多義性は、基本的な空間的用法(イメージ・スキーマ)がメタファーやメトニミーにより意味拡張された意味ネットワークとして記述できる。完了アスペクト機能は、空間移動のイメージスキーマが、メタファーにより状態変化として捉えられ、結果状態に焦点が置かれて前景化(終端焦点化)した文法化の結果と考えられる。動詞接頭辞付加による対格の出現や、格の交替現象も、結果状態の前景化(終端焦点化)として説明できる。動詞接頭辞付加により生じる微妙な意味の差異も、移動のイメージスキーマのどの部分が前景化されるのか、背景化された過程のどの部分が活性化されるかによって説明可能である。

研究成果の概要(英文)：The polysemy of Hungarian verbal prefixes can be analyzed as a semantic network that is constructed by metaphor and metonymy. The perfectivizing function of the verbal prefixes is derived from the grammaticalization process, by metaphorical extension from the central image schema and shifting the attention to the final stage of the process (end-point focusing). The focused or foregrounded element is marked by accusative case, because it is construed as the affected entity, and affected entities that change state, are expressed in syntax as direct objects. The subtle difference of meanings could be explained by the activation of backgrounded element of the image schema. The linguistic coding involves such factors as focus shift, foregrounding, backgrounding or figure/ground reversal.

研究分野：言語学

キーワード：ハンガリー語学 動詞接頭辞 文法化

1. 研究開始当初の背景

ハンガリー語の動詞接頭辞は、動詞の前に接続して、新しい意味をもつ複合動詞を形成する要素である。ドイツ語の前綴りやロシア語の接頭辞、英語の動詞句を構成する前置詞と似ている。

動詞接頭辞の基本的な機能は、動作や移動の方向を表わすことである。たとえば、動詞接頭辞 *be* は「中へ」という意味を動詞(基本動詞)に付加する(*megy*「行く」、*bemegy*「中へ行く、入る」)。

しかし、*be* には「中へ」という方向の意味の他に、接続する動詞によって、「全体的に～する」や「十分に～する」、「完全に～する」といったアクティオンズアルト的(行為や出来事の様相)およびアスペクト的機能を付加する役割もある。また元の動詞から予測不可能なまったく別の意味の動詞が形成されることもあり、意味的に非常に多義的で、学習上も習得がむずかしい。

さらに、通常は動詞の前に接続し、音韻的にも形態的にも動詞とともに一語を形成するが、統語的には独立した語のようにふるまうことがある。強調要素(フォーカス)、疑問詞、否定詞などがある非中立的な文においては、動詞接頭辞は基本動詞から分離して後方に置かれる。

このように、この文法カテゴリーは意味的にも統語的にも複雑なふるまいをすることから、十分に記述されているとはいえない。そのため学習上も習得が非常に困難な要素である。とりわけ、その意味と機能はきわめて多様で多義的である。

しかし、一見かなりかけ離れているように見える異なる意味の背景に、なんらかの必然的関係性があることが明示できれば、ハンガリー語教育法や辞書の記述に大いに役立つはずである。

そこで、英語の場所関係を表す前置詞の分析に使われた認知意味論的分析法を応用すれば、ハンガリー語の動詞接頭辞の多義的用法は、もっとも基本的な空間的用法(基本的イメージ・スキーマ)からメタファーやメトニミーなどによって意味拡張され、時間をはじめとする抽象的な関係、さらには完了アスペクトを付加する機能にまで拡大し、文法化していったと仮定でき、意味ネットワークとして記述できる可能性があるかと想定した。

また、動詞接頭辞の語彙的意味が希薄になり、文法的意味を獲得する文法化のプロセスは、いくつもある動詞接頭辞により、かなり異なる様相を呈している。たとえば、歴史的に本来「後ろへ、戻って」という意味を有していたとされる動詞接頭辞 *meg* は、今日では完了アスペクトを付与する機能しかもっておらず、完全に文法化している。言語に普遍的に観察されるこの「文法化」の観点から、動詞接頭辞の役割を見直す必要性が出てきた。

さらに、動詞接頭辞が動詞に接続すると、動詞のとり項が変化する現象があり、なぜそ

のような構文変化が生じるのかを解明する必要があった。

2. 研究の目的

本研究では、以下の点を明らかにすることを目的とした。

(1) ハンガリー語の動詞接頭辞の語彙的意味と文法的機能を的確に記述する。

(2) さまざまな動詞接頭辞の文法化のあり方やその背景を、視点の移動、焦点化、「図」と「地」の反転、メタファー、メトニミーといった認知言語学の枠組みによって検討し、記述する。

(3) 動詞接頭辞が動詞に付加されることにより、新たな項(対格)が出現したり、項の交替(場所格と対格)が起きるなど、構文変化が生じる点に着目し、こうした変化がなぜ、どのようにして生起するかを検討し、記述する。

(4) 成果をハンガリー語教育や辞書記述に役立てる方法を検討する。

3. 研究の方法

以下の作業を実施した。

(1) 文献の収集と検討

ハンガリー語の動詞接頭辞に関する共時的および通時的文献および文法化、認知意味論の文献を収集し、検討した。

(2) データの収集と整理、検討

ハンガリー科学アカデミー言語学研究所の言語コーパス *Magyar Nemzeti Szövegtár* (<http://corpus.nytud.hu/mnsz/>) を利用して、ハンガリー語動詞接頭辞 *meg*, *el*, *ki*, *be*, *fel*, *le* の用例を収集し、整理分析した。ハンガリーの現代作家 *Nádas Péter* の作品(*Egy családregény vége*) を分析して、動詞接頭辞の一般的でない用法を抽出して検討した。

(3) データや考察の妥当性の検討

収集した用法の妥当性、一般性、特殊性、および分析の妥当性について、ハンガリー語学の専門家の助言を得た。成果を類型論研究会や日本ウラル学会、国際ハンガリー学会、国際フィン・ウゴル学会で報告し、意見や助言を得た。

4. 研究成果

(1) ハンガリー語動詞接頭辞 *ki* が再帰代名詞の対格形とともに使用されている用法のデータを収集して分析した結果、動詞接頭辞 *ki* が再帰代名詞の対格形とともに使用されている用法のほとんどは、自動詞のなかでも、動作の主体が主語になっているいわゆる非能格動詞であること、また、意味的には「動作や行為を十分に行う」という意味を付加す

ることがわかった。本来、「外へ」の意味を表す動詞接頭辞 ki が、なぜそのような意味を持つのかについて考察した結果、「外への移動」という空間的なイメージスキーマが、メタファーにより状態変化として捉えられ、さらに結果状態に視点が当たることにより、結果状態が前景化(終端焦点化)されたと考えられること、再帰代名詞の対格形が現れることについても、結果状態の前景化により、状態変化した対象(全体的に影響を受けた対象物)が目的語になると説明できることがわかった。この成果を、平成 22 年 8 月 9 日~14 日にハンガリーのパーズマーニ・ペーテル・カトリック大学で開催された国際フィン・ウゴル学会において発表し(発表) 論文(論文、)にまとめた。

(2) ハンガリー語の動詞接頭辞のなかで、もっとも文法化が進んでいる meg についての先行研究を収集し、meg の意味機能がどのように記述されているかを、整理し、比較、検討した。これまでの研究で確認したように、meg の主要な意味機能は動作の完了を表す機能であるが、それ以外のさまざまな用法についても、統一的な説明ができないかを検討するために、一般的に状態の開始を表すと記述されている用法に焦点を当てて研究を進めた。

ハンガリー語動詞接頭辞 meg が状態の開始を表している用法のデータを収集して、分析した結果、「好きである」「嫌いである」など心理状態を表す動詞に接続し、「好きになる」や「嫌いになる」のような状態変化を表す動作動詞を形成する事例を確認した。

動詞接頭辞 meg の完了の用法は、これまでの研究で明らかになったように、meg が本来「うしろへ」の意味を表していたことから、「うしろへの移動」という空間的なイメージスキーマが、メタファーにより状態変化として捉えられ、さらに結果状態に視点が当たることにより、結果状態が前景化(終端焦点化)されて形成されたものと考えられるが、状態の開始を表す機能も、これと同様に、「好きでない」あるいは「無関心な状態」から「好きである」状態への状態変化が完了すると捉えることができ、これにより「状態の開始」にかわり「状態変化の完了」として、完了用法のひとつとして同じ枠組みで説明でき、ハンガリー語教育にも応用できることがわかった。

この成果を、平成 23 年 8 月 22 日~27 日にルーマニアのバベシュ・ボヤイ大学で開催された国際ハンガリー学会において発表し(発表) 論文にまとめた(論文)

(3) 動詞接頭辞 meg の主要な意味機能は動作の完了を表す機能であるが、それ以外にもさまざまな用法がある。しかし、そのなかでも動詞接頭辞 meg が付加することによって生じるさまざまな意味のニュアンスについては、先行研究ではまだ十分に記述されてい

いのが現状である。そこで、データを収集して分析を行った。さらになぜそのような微妙な意味のちがいが生じるのかについて、統一的な説明ができないかを検討した。

その結果、動詞接頭辞 meg が付加されると、「なんとか~する」「やっと~する」といった意味を表す事例があることが確認された。動詞接頭辞 meg の完了の用法は、これまでの研究で明らかになったように、meg が本来「うしろへ」の意味を表していたことから、「うしろへの移動」という空間的なイメージスキーマが、メタファーにより状態変化として捉えられ、さらに結果状態に視点が当たることにより、結果状態が前景化(終端焦点化)されて形成されたものと考えられる。これに対して、「なんとか~する」「やっと~する」といった意味は、始点から到達点への移動のイメージスキーマのなかの移動の過程の部分、あるいは、状態変化の過程の部分意識される、すなわち、背景化されている要素が活性化されることによって生じると説明できることから、この用法も移動のイメージ スキーマという枠組みで分析できることがわかった。同時に背景化された要素もなんらかの役割を担っており、その重要性が確認できた。

(4) 動詞接頭辞のなかで比較的的文法化が進んでいる el について用例を収集し分析を行った。その結果、「なんらかの起点から離れて、外れて、斜めに」「見えないところへ」「長い間ずっと~する」「最後まで~する」、「完全に~する」、「~しすぎる」「誤って~する」「ついに~する」といった意味拡張が確認できた。

これらの多様な意味機能は、他の接頭辞と同様に、「ある起点から離れて到達点に至るまでの移動」という空間的なイメージスキーマが、メタファーにより状態変化として捉えられたり、結果状態に視点が当たることにより、結果状態が前景化(終端焦点化)されて形成されたものと考えられる。いずれの意味機能も、始点から到達点への移動のイメージスキーマのなかのどの部分が意識されるのか、移動の過程なのか、あるいは状態変化の過程の部分なのか、背景化されている過程のどの部分が活性化されるかによって意味のちがいが生じると説明できることが確認できた。

(5) 「~の中へ」の意味を表す動詞接頭辞 be の用法のデータを収集し、それらの意味機能を文法化の観点から分析し、文法化の程度と構文との関連性について検討した。

その結果、「~の中へ」という基本的な意味をもつ接頭辞 be にも、中への移動による空間変化(へっこむ、閉じる、満たされる、おおう)から、空間変化の完了(完全に~する、最後まで~する)といった拡張された意味があり、文法化の現象が観察され、完了ア

スペクトを表わす文では対格構文が使われることが確認できた。

また、be は歴史的にみると、使用頻度も低く、完了アスペクトをあらゆる機能への文法化の程度も低い、最近の現象として、とりわけ若者ことばにおいて、使用域が広がっていることが観察された。

新たな使用例において、be は完了アスペクトや、微妙なニュアンスを表したり、場合によっては、まったく異なる新しい意味を生成する事例もあり、今後の課題として派生辞としての動詞接頭辞の生産性について検討する必要があることがわかった。

(6) 動詞接頭辞の生産性について考察するために、ハンガリーの現代作家 Nadas Péter の作品 (*Egy családregény vége*) を分析した。その結果、慣例的でない用例がいくつか見つかった。それらは辞書などには記述されていない用法であり、動詞接頭辞の生産性が高いことが確認できた。これについて研究会において報告を行った(発表)。

(7) とともに完了アスペクトを付与する機能をもつ接頭辞 *meg* と *el* のどちらも使用が可能な用例における意味の差異について分析し考察した。その結果、*meg* は予測される事態にたいして、*el* は予測できない、予想外の事態にたいして使われる事例があることがわかった。この差異はイメージスキームにおいて、背景化された要素が関連していると思われる。*meg* の語源は「うしろへ、戻って」、*el* のプロトタイプの意味は「離れて、遠くへ」であり、こうした意味は文法化により背景化し消失したとされているが、この背景化されたプロトタイプの意味が微妙な意味の差異を引き起こしていると仮定でき、今後の課題となった。

(8) 動詞接頭辞つきの動詞は対格を項としてとる傾向があり、多くの場合、定冠詞をともなって表れる。そのため動詞は定活用になることが多い。動詞接頭辞の機能として、事象を記述するさいに、物事を限定する役割があることが想定される。ハンガリー語においては定・不定の概念が重要であるが、そこに動詞接頭辞も関与している可能性を指摘した(論文)。

(9) さまざまな動詞接頭辞の意味や用法について得られた知見を『ハンガリー語単語集』およびハンガリー語の入門書『ニューエクスプレス ハンガリー語』における記述や練習問題などに応用した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6 件)

Waseda Mika, “A *meg* igekötő funkciója, kognitív keretben” 『ウラリカ』査読有、16号、2015、掲載予定

早稲田みか「ハンガリー語における定・不定の概念」査読無、『日本語学』vol. 34-3 明示書院、2015、pp.62-70

早稲田みか「多様なことば、共通する特徴-ハンガリー語からみえてくるもの-」野村泰幸編『ヨーロッパ・ことばと文化』査読無、大阪大出版会、2013、pp.23-40

原千晶、江口清子、早稲田みか「ハンガリー語動詞接頭辞 *ki* の意味構造」『ウラリカ』査読有、15号、2011、pp.9-25

Waseda Mika “The Hungarian verbal prefix *ki* and the ‘fake’ reflexive pronoun - cognitive approach to the Hungarian verbal prefixes” *Congressus XI. Internationalis Fenno-ugristarum, Pars V, dissertationes sectionum et symposiorum ad linguisticam*, 査読無 Piliscsaba, 2011, pp. 190-199.

早稲田みか「ハンガリー語動詞接頭辞の多義性と格交替」『類型学研究』査読無、第3号、類型学研究会、2011、pp.127-139

[学会発表](計 5 件)

早稲田みか「ナーダシュ作品における動詞接頭辞の用法」第二回日本語翻訳セミナー、2014.9.15. Balatonfüred (Hungary)

Waseda Mika “A magyar igekötő nehézségei a japán tanulók számára” Petőfi Sándor Evangélikus Gimnázium, 2014.9.4. Bonyhád (Hungary)

Waseda Mika “*meg* igekötő funkciója a megszeret igében - kognitív nyelvészet tekintetében” Nemzetközi Hungarológiai Kongresszus, 2011.8.23. Kolozsvár (Romania)

早稲田みか「ハンガリーにおけるウラル語学」第38回日本ウラル学会、2011.7.2.名古屋

Waseda Mika “A cognitive approach to the Hungarian verbal prefixes” *Congressus XI. Internationales Fenno-ugristarum*, 2010.8.12. Piliscsaba (Hungary)

[図書](計 2 件)

早稲田みか、岡本真理、バルタ・ラースロー
『ハンガリー語単語集』2012、白水社、236p.

早稲田みか、バルタ・ラースロー『ニュー
エクスプレス ハンガリー語』2011、白水社、
143p.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早稲田 みか (WASEDA, Mika)
大阪大学大学院言語文化研究科・教授
研究者番号：30219448

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

オスコー ベア (Oszkó, Bea)
ザイツ ガーボル (Zaicz, Gábor)
ケレステシュ ラースロー (Keresztes,
László)
レーヴァイ ヴァレーリア (Révai, Valéria)
エシュバッハ サボー ヴィクトーリア
(Eschbach Szabó, Viktória)